

全国棚田(千枚田)連絡協議会

棚田ライターラス

第45号 2007.3.25
(季刊・年4回発行)

発行／全国棚田(千枚田)連絡協議会

編集／ふるきやらネットワーク

〒169-0073 東京都新宿区百人町1-23-29-202

TEL 03-5389-9937/FAX 03-5389-0078

<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>

特集

2006年度

わたしたちの挑戦



栃木県立宇都宮白楊高校から(P2)。農業経営科休耕田への黒米田植え



個人正会員・安井一臣さんから(P5)。
栃木県茂木町でのトンボ池の補作業



愛知県新城市四谷の千枚田。小山舜一さんから(P6)。
企業のボランティアを受け入れて

栃木県立宇都宮白楊高校が茂木町小深で棚田保全活動

はくよう

もてぎまちおぶか

◆茂木町役場担当者

田村 幸夫(茂木町農林課課長)
伊藤 崇(茂木町農林課)

小島 三夫
松山 光子
町井 治子
五味測泰子

◆小深地区受け入れ農家

小林 章市(区代表)
小林 昭
中村 浩輔(農業経営科3年)
森川菜々子(農業経営科3年)
関根美奈子(農業経営科2年)
釜井麻友美(農業経営科2年)
三浦 佑氣(農業工学科2年)
高橋 和也(農業工学科2年)
矢口 隼人(生物工学科2年)
石川 和樹(生物工学科2年)
荒井 成美(農業工学科3年)
石川 真伍(農業工学科3年)



座談会参加者

◆司会 篠崎 昌彦

(栃木県立宇都宮白楊高校教諭)

◆栃木県立宇都宮白楊高校生徒

中村 浩輔(農業経営科3年)
福田 幸香(農業経営科3年)
森川菜々子(農業経営科3年)

関根美奈子(農業経営科2年)
釜井麻友美(農業経営科2年)

三浦 佑氣(農業工学科2年)
高橋 和也(農業工学科2年)

矢口 隼人(生物工学科2年)
石川 和樹(生物工学科2年)

荒井 成美(農業工学科3年)
石川 真伍(農業工学科3年)

平成14年、保全活動スタート。 平成15年に小深地区で本格化!

ラーメンの研究をしていましたこともあって、
棚田米で米粉ラーメンをつくりてみよう
となりました。

岩の作とい
うところは
山のなかで
耕作が不便。

半分以上、

休耕になっ

ているんじ

やないかな。

それをこれ

からどう復

元していつ

たらよいか。

私も40や50

歳だったらしいのですが、75ですかから体

がついていかない。困っているのが現状

です。でも、高校生がよくやってくれて

感謝しているんです。すごい篠がいっぱい

いましたから。景色もすごく良くなつて

ね。もっともとこちらも何かしなきや

と、うれしい悲鳴をあげているわけです。



篠崎教諭・まず、宇都宮白楊高校が棚田保全活動に取り組むようになった経緯ですが、役場の方からお願いできますか?

農林課・伊藤・平成14年に茂木町役場の方から、高校に話を持ちかけました。最初は、日本の棚田百選の入郷石畑の棚田で1年間、草刈りなど保全活動をしてもらつたんです。1年でほぼきれいになりました。翌年は新しい地区で、当時すいぶん荒れていた小深地区岩の作の棚田に、町の方で目を付けて高校生に入つてもらうようになりました。

最初の2年は、夏に2ヶ月の草刈り程度でした
が、先生方が熱心で「それだけではもつたらない。高校全部を挙げて授業のフィールドとして活用したい」という話になつたんですね。農業工学科が測量のフィールドに。生物工学科は生きも

事実、非常に助かっています。気力、やる気が出てきて、田んぼがきれいになって良かつたなと思っています。食べる分だけ米をつくっている人もいますが、誰もやめることなく農業を続けていることが良かったですね。今後もこのまま、みんなさんと交流を図つていきたいです。

責任の重大さを痛感しています。棚田の復興を目指している高校生の気持ちに我々はどう応えたら良いのか。ご覧の通り、一緒にやってみよう。そして、食品科学科は、米粉の調査をNPO法人棚田ネットワークと一緒にやってみよう。そ

地元・小島・ざっくりばらんに言うと、

たいへんだったと思うんですよ。きれいにしていただいてご苦労さんです。以前と比べると見違えるようになつて、みん

—高校生と地元で活動を語る座談会—

な「きれいになつた」と言つています。感謝しています。ありがとうございます。

地元・町井：昨年の夏には、高校生をうちに泊めるというホームステイをやらせてもらつて、最初は心配だったですよ。

家も古いしね。いまのお子さんに合うかどうか。でも、受け入れてみたら、孫みたいなで良かったですね。また機会があつたら、受け入れたいと思っています。

篠崎教諭：夏休みに3年生を中心としたメンバー7人が3組に分かれ、農家のお

宅で3泊4日で現場実習をやらせてもらいました。作業だけだと人間関係も薄いのですが、こうした機会があり、ありがたかったです。では、刈り払いが中心だつた農業経営科の高校生の方から。

森川(3年)：最初、車で通れないような道をトラックの荷台に乗つて棚田へ向かつたのですが、すごい危険なところで。昔の人がここを歩いて、手作業でやつてきたかと思うと感動しました。棚田も草や木がすごく生えていて、どこまで田んぼだったかわからなくて……。

夏休みに地元の町井さんのところに民泊させてもらつたんです。トイレが水洗じゃなかつたり、牛舎が端と端にあって虻がたくさん飛んでいて、すごく恐かつたのですが、お母さんが虻を取ってくれたり、すごくご飯もおいしくて……(涙)楽しかつたです。良い体験でした。ありがとうございました。

篠崎教諭：森川さんの家は農家ではなく、自然豊かなところで生活したことなかつたので、良くしてもらつたことが印象に残つたんですね。

「茂木に戻つてきたい」

中村(3年)：僕は最初、役場で図面を見せてもらつたんですよ。でも、大きさがわからなくて。それなりにメモを取つて向かつたけれど、草ぼうぼうで……。これが田んぼだったのかつて驚きながら。

皆勤賞は取れなかつたけれど、それなりに棚田に貢献できたかなと思いました。

刈り払いなど、高校生でできることってまだまだあると思っています。

こうしたなか、茂木町の棚田に興味を持つようになりました。以前から農業をやろうとは決めていたのですが、茂木町での新規就農の話も町長さんから聞いて、

茂木町で棚田保全をやっていくかなと。いえ、やるしかないと思うようになります。そうすれば、茂木の棚田を守つてしまふと。まずは高校卒業後、県農業大

学校に入り、兼業農家になるかどうかわかりませんが、ここに戻つてきたいと思つています。

篠崎教諭：中村君の家は職業的には農業とは関係がないのですが、農業を志して

いて、今回こちらで保全活動をして、町で新規就農ができるという話を聞いて、気持ちに加速がついたんですね。では、測量の方から感想をお願いします。

荒井(3年)：棚田は非常に起伏が激しく、体力的にたいへんでした。測量はいつも学校のなかでやつているだけですが、実習を通して、宇都宮では味わえない自然が味わえて良かつたです。

篠崎教諭：測量を終えた田んぼに笛を刺して目印を付け、上から下へ測つていつたんだよね。できあがつた測量図は、棚田の入り口のところに看板になつていて、高校の「農業クラブ大会」の発表者

として、全

国大会に駒を進め

た立場からはどうですか?

関根(2年)：はじめ棚田を見たときは感動して……。以

前は、ほとんど耕作放棄されていた

ということで、こんなにきれいな田んぼなのにこのままたれてしまふのはもつたいくて、ぜひ復興したいと思いました。

プロジェクト発表では、棚田についてみんなに知つてもらいたい一心で発表し

てきました。県大会の結果、関東大会に行けることになつて、関東いっぱいの人

に知つてもらいたいとそんな思いでした。

そうしたら、全国大会に行けることになつて。一人でも多くの人に棚田のことを

知つてもらえたのではないかと思つてい

ます。これからも少しでもみなさん役

に立てるようにがんばつていきたいと思

いますので、よろしくお願いします。

篠崎教諭：同じ農業を勉強している子どもたちのなかで発表するわけですが、高



校生が地元を顧みて、自分たちの勉強を地域に生かすことができるという一石では、生物工学科の方からも。

矢口(2年) 生物工学科では、植生調査のほか、虫など生物がどのくらい存在しているのか見てきました。去年の結果は看板にもなっていますが、これからも新たなことを調査していく予定です。

高橋(2年) 棚田はでかいなという感想と、刈り払いをしたことでぜんぜん違つてきて、活動をやつて良かつたなあと思っています。地元の方に食事とか用意してもらつてほんと、良かったです。

石川和(2年) 実家は群馬の沼田で農家をやつてているんですけど、高校に入つてから帰つていなくて、そういうときに棚田に行けて、自然と触れ合う良い機会でした。虫取りとか童心に返つて良かつたです。ありがとうございました。

「一番大切なことは人の気持ち」ということを学んで

篠崎教諭 では、地元の方で、何か心に残つてのことや要望はありますか?

小林昭 いやあ 大勢の力つていうのはたいしたものなんだなあ。篠をあれだけ刈つたんだもの。ズメも通れないような數だつたんだもの。たいへんだったよね。以前、この集会所で活動をスライドにして見せてもらつたけど、小深地区の人みんなに見せたいね。それから、この前のラーメンの試食会。おいしかったね。でも、何人から自分も呼びかけてほしかつたって声があつたね。

篠崎教諭 すみません。この前は人数の

縛りがあつて。この米粉ラーメンは、自分がひいきにしている宇都宮の有名なラーメン屋さんがあるのですが、そこに協力をしてもらい、地元の鮎を使って出汁を取り、食品科学科で研究してきた棚田米を使った米粉を3割入れたラーメンなんです。棚田サミットでも出店したいと考えています。その前に試食会も検討しています。最後に役場の方から、感想をお願いします。

田村課長 地元が温かく迎えてくれたことが良かつたですね。代表の小林さんなんて、みんなに「章ちゃん・章ちゃん!」

なんて言われてうらやましいくらい。そして、高校生諸君に、改めて棚田のすごさを感じ取つてもらえたことは良かつた。あんなところであんなにおいしいお米が取れるなんて思つてもみなかつたと思う。また、豊かな生態系が潜んでいることも。さらに、地元とおつきあいしてみると、地元の人がなんてあつたかいのか、みんな感じ取つたと思う。これからも活動だけではなくて、地域の人と深いつながりをつくり、地域の手助けとなりながら、一方でみなさんのが勉強のフィールドとして、互いに良い相乗効果で統けていけたらと思います。白楊高校の伝統として後輩に伝えていってほしい。

篠崎教諭 学校で勉強していることの実践の場を与えていただいて本当に感謝しています。その上、食事やお弁当などを振る舞つていただき、夏休みの宿泊ホームステイなどお世話になつて、ただ来て帰る関係ではなく、人と人との関係も学ばさせてもらいました。

ほかに400年前の検地帳を見せてもら

い、棚田や地域の歴史・文化に関する話も聞き、勉強になつていています。取り組みは学科によって違うのですが、みんな共通して、農家の方や役場の方と触れ合いながら、「一番大事なことは人の気持ちだ」ということをわかつてきていると思います。命の大切さや育みなども勉強できていると思います。

8月に棚田サミットという目標があり

ます。それを成功させ、「交流」という言葉では他人行儀なのですが、ますます

「章ちゃん」と呼べるような深い関係を築いて、互いに共通の目標を持って高め合つていけたらと思います。今日はお忙

にしてほしいです。

正直なところ、岩の作の棚田のある地域は、ややむると山のなかで負い目を持つて米をつくつてきていたかもしない。でも、みんなが来てくれたことで勇気が持てるようになつてゐるかもしれない。そういう意味でもお互いに良い関係ができていると思います。

行政の方も、「棚田に行く道が危険」

とのことですから直していくなど通いや

すい場所にしていきたいですね。みんなが来てくれてほんとうにうれしいです。

篠崎教諭 学校で勉強していることの実

践の場を与えていただいて本当に感謝し

ています。その上、食事やお弁当などを

振る舞つていただき、夏休みの宿泊

ホームステイなどお世話になつて、ただ

来て帰る関係ではなく、人と人との関係

も学ばさせてもらいました。

ほかに400年前の検地帳を見せて

もら

い、棚田や地域の歴史・文化に関する

話も聞き、勉強になつていています。

取り組みは学科によつて違うのですが、

みんな共通して、農家の方や役場の方と

触れ合いながら、「一番大事なことは人

の気持ちだ」ということをわかつてきて

いると思います。命の大切さや育みなども勉強できていると思います。

8月に棚田サミットという目標があり

ます。それを成功させ、「交流」という

言葉では他人行儀なのですが、ますます

「章ちゃん」と呼べるような深い関係を

築いて、互いに共通の目標を持つて高め

合つていけたらと思います。今日はお忙

しいなか、ありがとうございました。

第13回全国棚田(千枚田)サミット 栃木県茂木町で開催!

テーマ:「美しい土の里から~棚田から明日への提言~」
日時:2007年8月24日(金)~25日(土)

美しい雑木の山々に抱かれた栃木県茂木町での全国棚田サミット。棚田めぐりは、日本の棚田百選の「入郷石畑の棚田」のほか、県内同じく百選に認定された那須烏山市の棚田にも足を運ぶ予定。サミットでは宇都宮白楊高校の生徒が活動実績を発表します。お楽しみに。



農業経営科、畦畔の刈り払い作業（写真提供：宇都宮白楊高校）

茂木トンボプロジェクト始動！

個人正会員・NPO法人・棚田ネットワーク

安井一臣

田んぼの賑わいをふたたびく

NPO法人・棚田ネットワークでは、2005（平17）年から、栃木県茂木町で「岩の作棚田保全プロジェクト（通称・茂木トンボプロジェクト）」と名づけた棚田保全活動を進めている。当面の活動目標は、ハッチョウトンボ（世界一小型のトンボで、体長は僅か16～18mm、学名は*Nannophya pygmaea*）、「小さな妖精」という意味を持つ）をこの棚田に呼び寄せようというものである。

このかわいらしいトンボは、必ずしも知名度は高くないが、鹿児島県から青森県までの広い範囲に点在的に生息することが確認されている。茂木町内の数箇所の棚田でも観ることができる。

このトンボの生息環境のキーワードは、ミズゴケやモウセンゴケ、きれいな滲出水、日当たりのよい浅水湿地、草丈の低い水生植物が生える開放水面などである。これは休耕して2～3年の中山間地域棚田の環境とよく似ている。事実、減反政策が始まつた1970年代に、各地の棚田でこのトンボが大発生したことが、環境省（当時の調査で明らかにされている。言い換えると、休耕田が大好きなトンボである。だが、休耕期間が長くなると、田んぼの乾燥化や湿生植物の減少、多年生木本類の進入による開放水面の減少などにより、いつの間にか消滅するのが通例である。このトンボが、2004年秋、栃木県

会現地見学会の席で話題になり、2～3年毎の代かきと水張り休耕が、その生息維持に有効ではないかという結論に達した。これを受けて翌2005年から、茂木町小深の「岩の作棚田」で水張り休耕を模した私たちのトンボ池づくりがスタートした。手始めの基礎調査により、このトンボ池やその周辺には10種以上のトンボが生息することが判明したので、地元集落の理解と大きな支援を得ながら、2006年よりトンボ池の拡大と本格的なトンボ調査を開始した。

その結果、19種類のトンボの生息が確認された。残念ながら、まだハッチョウトンボの呼び寄せには成功していないが、冬季も成虫で越冬する「ホソミオツネントンボ」の確認は大収穫であった。このトンボリストの20番目にハッチョウトンボが登場してくれることに胸を躍らせている。

また、この年から栃木県立宇都宮白楊高校・農業クラブがこの活動に本格的に参加してくれることになり、私たちの活動は大きく前進した。なかでも、高校生たちによる耕作放棄田の定期的な草刈り、いた棚田全体の現況地形図の作成は特筆に値する。炎天下で汗水を垂らしながら、この現実を見て見ぬふりはできない」と言つた高校生の言葉は感動的で頼もしい。

鳥山町（現那須烏山市）で開かれた棚田学

会現地見学会の席で話題になり、2～3年毎の代かきと水張り休耕が、その生息維持に有効ではないかという結論に達した。これを受けて翌2005年から、茂木町小深の「岩の作棚田」で水張り休耕を模した私たちのトンボ池づくりがスタートした。手始めの基礎調査により、このトンボ池やその周辺には10種以上のトンボが生息することが判明したので、地元集落の理解と大きな支援を得ながら、2006年よりトンボ池の拡大と本格的なトンボ調査を開始した。

その結果、19種類のトンボの生息が確認された。残念ながら、まだハッチョウトンボの呼び寄せには成功していないが、冬季も成虫で越冬する「ホソミオツネントンボ」の確認は大収穫であった。このトンボリストの20番目にハッチョウトンボが登場してくれることに胸を躍らせている。

また、この年から栃木県立宇都宮白楊高校・農業クラブがこの活動に本格的に参加してくれることになり、私たちの活動は大きく前進した。なかでも、高校生たちによる耕作放棄田の定期的な草刈り、いた棚田全体の現況地形図の作成は特筆に値する。炎天下で汗水を垂らしながら、この現実を見て見ぬふりはできない」と言つた高校生の言葉は感動的で頼もしい。

一つの切り口にしているが、その基本理念は、米を作らなくても棚田を維持・保全する具体的方法の試みである。2007年からは、調査の対象をトンボだけではなく、ここに生きる水生昆虫類全般に拡大することにした。都会の子どもたちの米作り体験や田んぼの生き物観察会、景観資源作物の植栽実験なども計画し、これまで農業や棚田に縁が薄かった一般市民にも広く参加を呼びかけている。言い換えると、棚田ファンの拡大作戦である。

改めて述べるまでもなく、米の消費減をはじめとする多くの社会的事情により、わが国の水田の約4割は、生産調整といふ名のうちに、転作や休耕、耕作放棄されている。仮にこれらを一箇所に集めるところ、九州、四国、中国地方の全水田面積にも匹敵する。中でも中山間地域では、高齢化や過疎化と相まって、年々拡大する耕作放棄された棚田の荒廃は目を覆うばかりである。

その一方、これまで漠然と懸念されていた将来の食糧不足問題は、今なお続く世界人口の増大、^{*}BRICsやそれに続くNext11の経済成長、畜産食品の消費拡大、穀物のバイオエタノールやバイオディーゼルオイル原料への転用などにより、わが国をも巻き込んだ世界規模での現実問題として徐々に差し迫つてきていると言つても過言ではないだろう。

私たちの活動はハッチョウトンボを一



* BRICs=経済発展が著しいブラジル、ロシア、インド、中国の総称

* Next11=BRICsに続く経済発展国11カ国(韓国、パングラデシュ、エジプト、インドネシア、イラン、ナイジェリア、バキスタン、フィリピン、トルコ、ベトナム、メキシコ)を指す用語

棚田のための村を応援する

3000人プロジェクト

アストラゼネカ株式会社

前 浜 隆 広

鞍掛山麓千枚田保存会理事 小 山 舜 二

兵庫県多可町にて

弊社アストラゼネカ株式会社（本社・大阪市、代表取締役社長・加藤益弘）は、「高齢化する村を応援するプロジェクト」と題し、昨年11月1日（水）、全社員休業し、全従業員約3000人で社会貢献活動を開催した。

活動地区は国内40ヶ所の高齢化・過疎化した棚田地区などで、それぞれ30～50名のグループが訪問し、その地域のニーズに応じて農作業・山仕事・環境整備作業など（表1）を実施した。また、体操の専門家に依頼して開発した高齢者のための体操を地域の人々と一緒に行ったり、昼食会、慰労会などの交流会を行った。

本稿では、まずアストラゼネカ株式会社について紹介した後、このような活動に取り組んだ経緯、その内容と結果について報告する。

①アストラゼネカ (以後、AZと記す) について

1999年にアストラ社とゼネカ社が合併して誕生したイギリスの口

ンドンに本社を置くグローバル企業である。医療用医薬品（病院のみで処方される処方箋医薬品）を研究・開発・製造・販売しており、現在、世界100カ国以上で営業展開している。売上は約265億ドル（約3兆円）、従業員数は6万5000人である。

日本法人AZ株式会社は、AZ内でアメリカに次ぎ、第2位の売上で約2000億円、従業員数：約3000人である。主な製品は、抗癌剤、酸関連疾患治療薬、循環器系疾患治療薬、麻酔薬などである。

②活動に取り組む経緯

AZは世界的にCSR（Corporate Social Responsibility）で高い評価を受けている。（※ニューズウイーク誌日本版のCSR世界500ランクインでは2年連続世界No.1）日本法人でも「患者さんに貢献する」をミッションとし、「真のリーディングカンパニーになる。」をビジョンとして掲げて活動展開する中、社長の加藤が昨年の7月に本格的にCSR経営をスタートさせることを宣言した。

そして、CSR活動の第一弾として、医薬品企業が実施するにふさわしい「人と、人を支える環境に貢献する活動」で「3000人の全従業員が一齊に取り組む活動」に取り組むことを決定した。

企業を受け入れて

～愛知県新城市 四谷の千枚田～

11月1日（水）、世界に6万5000名

市長さんも企業が社会に貢献、しかも、

を抱える医薬メーカー「アストラゼネカ

社」はこの日、全社員約3000人を国内40ヶ所の棚田などに派遣。四谷の千枚田には県内支店の社員74名が訪れ、3班

に編成。1班は千枚田入り口付近にツツジ、サツキ、アジサイを植樹。女性陣は藁切り、藁まき、草取りを。2班は石崖の草取り。3班はふれあい広場の植樹、休息場の草取りなどに汗を流しました。

この事業は「高齢化する村を応援するプロジェクト」としてNPO法人棚田ネットワーク、東京ボランティア・市民活動センターの協力、農林水産省後援で開かれたものです。

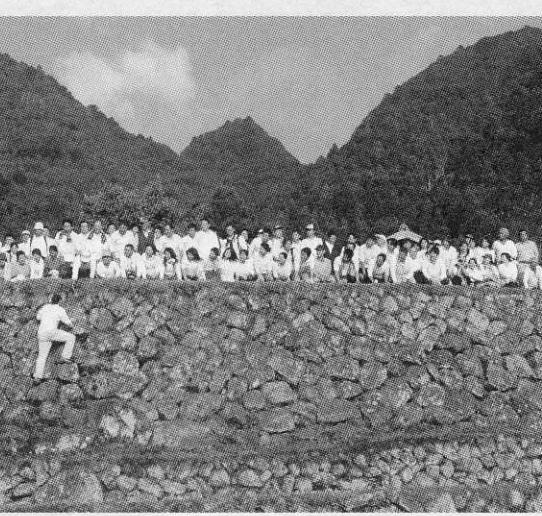
同時に訪れ、バスから降り立つたメンバーを見てビックリ仰天。皆、若い……娘

っこ（女子社員）もシラウオのような手をしたベッピン揃いだ。「こりやあ！百姓仕事は無理だ」と直感した。何はともあれ、編成した3班に分かれ、作業を開始した。はじめ「なかなかやるじゃん」と思っていたら「なかなか性がいいな」に変わり、次第に「休みながらやつとく

市長さんも企業が社会に貢献、しかも、

四谷の千枚田で奉仕活動をして頂くことに強く関心を持ち、記者懇談会にも図っていただき、同時に「四谷の千枚田を支援する」と約束されました。

当日は大型バス2台、自家用車数台が



四谷の千枚田では愛知万博の「昔の脱穀」や「サミット」で大変お世話になつた棚田ネットワーク代表の中島峰広先生（棚田学会副会長）と同事務局の高野光世女史の「これもすべて棚田、ふるさと日本国？」のためです……などと、甘いささやきから実現に至つたものです。

当方としてもボランティアの受け入れは初めてのことで「本当に都会の若者が百姓仕事が出来るのか、怪我などされたら困っちゃう」ということで保存会・田吾作、棚田つ娘、お助け隊の有志が出役。植樹場所の地拵えや藁切りなど、安全対策を事前に行いました。

(全社での一体感の醸成も課題であった。)

次に、東京ボランティア・市民活動センター（所在地・東京都、代表・山崎美貴子）の協力を得て、様々な棚田支援活動を展開するNPO法人棚田ネットワーク（所在地・東京都、代表・中島峰広）を紹介いただいた。

AZ社においては、多機能を有する棚田保全の価値に加えて、棚田のある中山間地は高齢化、過疎化の進んだ地域で、その維持・振興は日本の社会的課題でもあり、取り組むに充分価値のある活動と考え、棚田地区でのお手伝いを決定した。その後、棚田ネットワーク主導により、全国40ヶ所の棚田地区などで弊社のボランティアを受け入れいただいた。（棚田ネットワーク、東京ボランティア・市民活動センターには最後まで本プロジェクトをサポートいただいた。）

③結果

| No. | 受け入れ地区 | 作業内容(予定) |
|-----|----------------------|-------------------------------|
| 1 | 北海道石狩郡当別町 金沢 | 植樹 木の冬廻いなど |
| 2 | 岩手県一関市 大東町 | トマトの収穫と整理など |
| 3 | 山形県朝日町 和合平 | リンゴの葉っぱ取りなど |
| 4 | 新潟県十日町市 (旧松之山町)浦田 | 茅場での茅の刈り取りなど |
| 5 | 新潟県十日町市 (旧松代町)蒲生 | 地域の歴史資源の道普請 施設の冬廻いなど |
| 6 | 新潟県十日町市 (旧十日町市)池谷 | 棚田周辺の林道の整備 など |
| 7 | 栃木県那須烏山市 国見 | 棚田での草刈りなど |
| 8 | 栃木県茂木町 竹原 | 滝周辺の整備など |
| 9 | 千葉県鴨川市 | 棚田での農作業各種 放置竹林の間伐など |
| 10 | 東京都日の出町 大久野 | 放置竹林の間伐など |
| 11 | 山梨県増穂町 平林 | 棚田での次年度の稻作準備 トマト畑の後片付けなど |
| 12 | 群馬県川場村 谷地 | 林道・遊歩道の手入れ 雑草の刈払いなど |
| 13 | 長野県千曲市 八幡 | 棚田での次年度の稻作準備 など |
| 14 | 静岡県松崎町 石部 | 棚田での次年度の稻作準備 など |
| 15 | 静岡県菊川市 上倉沢 | 棚田の復旧作業など |
| 16 | 静岡県浜松市 大栗安 | 水車の里周辺の草取り 花等の植え付けなど |
| 17 | 愛知県新城市 四谷 | 棚田の復旧作業など |
| 18 | 岐阜県恵那市 坂折 | 棚田の復旧作業など |
| 19 | 三重県いなべ市 川原白滝 | 棚田の復旧作業など |
| 20 | 滋賀県高島市 畠 | 棚田の復旧作業など |
| 21 | 福井県越前町 梨子ヶ平 | 草刈り(国定公園)など |
| 22 | 滋賀県米原市 曲谷 | 猪防止柵の撤去作業など |
| 23 | 京都府 京丹後市・ 伊根町 | 風倒木・間伐木の撤去、 海浜清掃など |
| 24 | 京都府舞鶴市 与保呂 | 放置竹林の間伐など |
| 25 | 和歌山县有田川町 沼 | 棚田の復旧作業など |
| 26 | 兵庫県多可町 加美区 | 棚田の復旧作業など |
| 27 | 兵庫県佐用町 | 谷川・溝の掃除 棚田の復旧作業など |
| 28 | 兵庫県丹波市 青垣町 | 加古川源流の清掃作業など |
| 29 | 奈良県明日香村 稻渕 | 草刈り、竹やぶの清掃など |
| 30 | 和歌山县海南市 上谷 | 桜の下草刈りなど |
| 31 | 和歌山县紀美野町 | 棚田でのチューリップの球 根植えなど |
| 32 | 広島県安芸太田町 中筒賀 | 猪の柵の点検及び草刈り 棚田の復旧作業など |
| 33 | 島根県吉賀町 柿木村 | 棚田の復旧作業 展望公園の清掃など |
| 34 | 山口県長門市 油谷後畑 | 棚田の復旧作業など |
| 35 | 徳島県三好市 井川町 | 棚田の復旧作業など |
| 36 | 徳島県上勝町 旭 | 千年の森ふれあいの館の清掃 棚田の復旧作業など |
| 37 | 福岡県うきは市 吉井町 | 柿の収穫作業など |
| 38 | 大分県玖珠町 山浦早水 | 棚田の復旧作業 高齢者の家の草取りなど |
| 39 | 佐賀県唐津市 相知町 | 棚田の復旧作業 棚田が見える展望所の植木下草刈りなど |
| 40 | 熊本県水俣市 久木野 | 棚田の石垣の草取りなど |

【表1】活動地域リスト

取り上げ件数が一つの指標となると考える。

T.V.、新聞社など50社に取り上げられ、テレビで5分の特集になった地区もあった。

次に、受け入れ地のご感想はなんと100%「とてもよかつた」で、「100回くらいありがとうと言いたい」「素晴らしい会社に素晴らしい社員あり」「今でも村ではAZの思い出話をしている」など嬉しく嬉しい声が山のように届いている。

①活動員数 ②組織立った活動 ③社員の誠実さ の3点での評判が高い。僅か1日の活動に対し、法外なご評価をいたしました。ただ従業員3000人が恐縮している。最後に、社内の声は、なんと90%を越える従業員が「よかったです」と回答している。この種のアンケートでは70%を越すと大成功といわれており、専門家に見せると驚愕の数値だそうだ。

代表的な感想は「お年寄りとの交流が楽しかった」「草刈りなどの作業に夢中になつた」「土の匂いが新鮮でリフレッシュした」などの喜びの声である。(今後活動継続へのモチベーション維持を

まず、社会からの評価は、メディアでの視点でまとめている。

れん」と言うほどに、それぞれの持ち場の作業を積極的にこなしていただいた。私は(舜)も愛車「ダックスフント」で見廻しながら娘っこ達に「藁を撒くには気に入らない上司に後ろからぶつける要領で」とか、草をむしる要領は「こん畜生」と捻り取ればいい……などと、いらんことを言つて廻り、久しぶりに溜飲をさげました。

何れにしても善くやつていただいた。各班長のお札の交換会では地元として「期待の120%の出来であった」とか「あなた達が植えたサツキやアジサイの生長を見ながら、来年も是非来て下さい。お

待ちします」など、AZ社からは各班長さんから「慣れない仕事で足手縛いにならなかつたか。少しでもお役に立てればと、社員全員が一生懸命やつた。すがすがしい気持ちをいたしました」等々の挨拶が交わされました。

【反省会】

皆んな善くやつていただいた。社員の誠意実直がみられ、会社の姿勢が伺われる。初めての経験で戸惑つたが、来年も来て頂けるなら、作業は勿論、棚田米を食べてもらおう。等々、千枚田を荒らすイノシシの肉を頬張りながら和気藹々の時を過ごしました。

④最後に

既に、今年の活動日での各地域の方々との再会を楽しみに待つ社員の声を聞く。棚田地区及び住民の皆さんのが魅力に驚いています。

また、日本の企業ボランティアはまだ未成熟で、実際の行動による社会貢献を定着させていくのはこれからと聞く。本プロジェクトが刺激となり、日本の企業ボランティアの拡大に貢献できればとも思う。最後に、個人的な想いであるが、今回の活動で多くの棚田地区を訪問し、各地区の抱える課題を知ると同時にビジネスマンが訪れるところで、新たな棚田ビジネス提案が輩出されるとも考える。

発足3年！滋賀県棚田ボランティア活動

滋賀県農政水産部 丸山徹

滋賀県内には約2200ha（県内水田面積の4.4%）の棚田地域が存在する。これら地域は良質な近江米を生産するだけでなく、地下水の涵養や多様な生態系の形成など様々な役割を持ち、豊かな生態系に支えられた景観に対する評価も近年高まっている。

これら棚田地域が有する様々な機能を發揮するため、滋賀県では集落営農や土地改良をはじめ各種事業を推進しており、

今日は、その中の「中山間ふるさと・水と土保全推進事業」で行っている棚田ボランティアの活動について紹介する。

この活動は、棚田地域で企画された保全活動へのボランティア参加者を、広く滋賀県が募り、関係者間の調整を図りながら保全活動の実施を支援するもので、併せて、交流を促進するためのユニークな取り組みとして、「地域通貨制度」を導入している。「地域通貨」は、限られた地域、用途での使用を前提とし、地域経済の活性化や、交流の促進、ボランティア活動の促進等の効果が期待され、全国で様々な取り組みが実施されている。

本県では、保全活動に1日参加すると参加者は「地域通貨」を1枚入手。秋には棚田米と交換することができる「引換券方式」での導入を中心に取り組みが拡大しつつある。

棚田ボランティアによる保全活動については、平成16年10月24日に第1回目の

活動として約4000m²の休耕田の復元作業に取り組んだ。以降、獣害防止電気柵の設置や抜根、石拾いの他、新たな柵田の復元や畦畔、休耕田、獣害防止柵の管理を中心に保全活動を継続している。また、柵田や農業についての理解を深めてもらうため、地域通貨を使って参加できる田植えや稻刈り体験、地域散策ツアーや、しいたけ作りなどを順次実施している他、企業の社会貢献活動の受け入れを行なうなど、都市と柵田、両地域住民の交流を通じた保全活動を推進している。

地域だけで柵田を守るのではなく、行政が調整役となることで、農業に関心を持つ方、柵田米を食べたい方、美しい景観を守りたい方、動植物のすみかを守りたい方という様々な動機を持つ方が活躍できる場、きつかけを提供でき、柵田を保全したいという都市と柵田、両地域住民の理解や協力関係を深める事ができます。

ボランティアを受けるまでは、「わざわざ草刈りにボランティアで来る人がいるのか」と半信半疑で始めた地域の方も、夏の暑い日中や

冬の小雪が舞うような中でも熱心に保全活動を行う参加者の姿に感銘を受けられている。参加者に、地域の方と同じ作業レベルを期待する事は難しいが、柵田を守りたいという強い思いを持った人が多く、個々の想いを發揮できる環境づくりを進めていく事で様々な活動の展開が期待できる。

また、本県で独自に取り組んでいる地域通貨の導入に関して行ったアンケートでは、回答者のほぼ全員が「活動への参

加意欲向上に効果があつた」と回答した他、地域通貨を活用した様々な企画が実施されることで活動の幅も広がっている。今後も、ボランティアによる柵田保全活動を継続しながら、支援者や柵田のファンを増やしつつ、都市と柵田、両地域住民のネットワーク構築を進めていきたい。都市と柵田、両地域住民の交流が、柵田を守るだけでなく、柵田を活用した活動へと発展し、柵田地域が元気を取り戻すきっかけになることを願う。

滋賀県の柵田マップ



凡例
—— 市町界
■ 柵田地域

関連ホームページ「おうみ柵田ネット」
<http://www.pref.shiga.jp/g/noson/tanada/newpage5.html>

大山千枚田保存会を支援

株式会社大塚商会 会長 大塚 実



私は陶芸の里、栃木県益子町の窯元の家に生まれました。赤松の大木が茂る標高340mの里山を仰ぎ、近くの清らかな小川で遊んで育ちました。浜田庄司氏が主導する民芸調の焼物が盛んで、そこに育った私は、いつしか自然の景観を愛し、田畠や窯場で働く人々の姿を美しいと感じるようになつていきました。

旅行が好きで、美しさを求めて国内外の各地を旅してきました。大自然の美や、人工と調和した景観の美しさに感動しました。その反面、効率化の名のもとに行われた破壊と建設の工事によつて失われた多くの景観を嘆いてきました。その後美しい自然の保護再生に第2の人生を賭けるようになりました。

平成16年11月に、「棚田百選を旅する」という本を読み、東京に近い千葉県鴨川市に、大山千枚田という棚田があることを知り、

息を呑み、声もなく佇立していました。ローマの野外競技場のように、375枚の棚田が何段にも重なつて半円形に拡がり、向かいの山には杉や雜木、竹などが生い茂っていました。この緑の森と棚田の拡がりが織り成す景観の美しさは未だ嘗て観たことのないものでした。

平地の田と較べて棚田の労働生産性は高くない。しかし、遠い祖先の時代から嘗々として耕し続けられた棚田は、長年の努力の結晶であり、よそにない景観の美しさがある。大山千枚田は市当局がこの景観を守ることに熱心で、官民一体になつて活動しているのが素晴らしい。

棚田保存会によって棚田オーナー制度が設けられている。それに魅せられた都会の人々の人気が高く、毎年抽選によって選ばれている。しかし、ここも台風などによる土手の崩壊で、毎年放棄田が増えているという。

その話を聞いて、修復のために小型ショベルカーの寄贈を申し込み、快く受け入れて頂きました。その後、研修宿泊施設にも協力するなど、棚田の保護保全にお役立ちできるようになり、心から喜んでもいます。その後は私の第2の故郷として、度々訪れるようになりました。

大山千枚田保存会の理事長をはじめ、関係者各位の熱意と努力に対し、改めて深く敬意を表すると共に、今後一層た途端に

島根県浜田市 定住サポートみずすみ

（海幸・山幸物語）

定住サポートみずすみ 事務局 川神由理

本州中国地方、広島県と岡山県の上にズラズラと長くあります島根県。その中でも県庁所在地よりズラズラと西に位置します浜田市の西のはずれに我が「三隅町」

て来んさつたねえ、待つとつたよ！世話やき三隅人の合言葉です。

4月は「はりも山自然を食う会・大平桜まつり」。5月は「みすみ公園つつじ祭り」。6月「小原ほたる祭り」。7月「田ノ浦夕日神楽」。8月は「みすみ川フェスタ」。9月は「石正美術館お月見会」。

棚田百選に選んでいた「井野室谷の棚田」があり、重要無形文化財に指定いただきました石州手すき和紙があります。三隅町の自慢を沢山しましたが一番自慢したいのが「三隅人」地元の石見弁で言うならば、「ええひとがえつと居る」温かくて、やさしい、でもちよつと世話やきな三隅人。

そんな三隅をまるごと皆さんに知つていただきたくて、9年前仲間と始めたのが三隅を紹介する「第2のふるさと発見ツアーハー」でした。最初は何もわからずただ知つてほしい、来て欲しいとの一念で右往左往始めたのです。そのツアーハーが発端となり、三隅町の定住推進委員の集まりからうまれた「定住サポートみずすみ」です。

平成18年4月に、三隅町出身、日本画家「石本正」画伯の作品を収蔵、展示している石正美術館内にある喫茶店に、事務局を置き町内外の三隅ファンの皆様との出会い、ふれあいを楽しんでおります。「よう来んさつた」から始まり「また帰つて来んさいよ」そして「よう帰つて来んさい。まつとるけんね!!」

都市住民が棚田に出会う場

「東京棚田フェスティバル」

個人正会員 NPO法人棚田ネットワーク事務局長

高野光世

昨年11月12日(土)、東京・飯田橋にある株大塚商会11階の社員食堂「大塚俱楽

イブ（あんご合唱団、歌手Y a eさん、棚田たくじさん）など。隣接する会議室

けです。目指したイメージは「東京でやる棚田の収穫祭」。

部」で、「東京棚田フェスティバル」が開催された。NPO法人棚田ネットワークの発足十周年記念を兼ねたこの催しに雨天にもかかわらず約550人が参加し

では、大塚商会会長・大塚実氏と棚田博士・中島峰広氏の対談や、若者たちのパネルディスカッションなどが行われ、写真や絵画の展示コーナー、棚田米の食べ

シンポジウムや講座などによつて硬めの催しなら経験がありますが、こういうエンターテインメント系の企画は会としては全く初めて。とにかく若手中心で進

ステージ企画はド迫力の能登・御陣乗太鼓や千葉・鴨川の優雅な里舞、ミニラ

集まつた人たちは、郷土料理に舌鼓を打つたり、太鼓や舞に息を呑んだり、各出

お祭りだから食べ物がほしいね。出しどうする？ 予算はどのくらいの目

展ブースで棚田について質問するなど、
“棚田”の多彩な顔を楽しんでいた。

通しで、それはどうやつて集めるの？
お客様は何人ぐらい見込むの？ 会場

都市住民を中心とする棚田の応援団

はどこ？　スタッフは何人くらい必要？
何もかもがわからない。こんな調子で本

棚田ネットワークが発足したのは1995年12月2日。高知県檮原町で第1回全国棚田（千枚田）サミットが開かれた約2カ月後です。サミットに参加した関東在住の個人会員が軸となり、14人でスタートしました。

本当にできるのか、と思ったこともあつたけれど、とにかく集まつて知恵を絞ればどうにかなるもので、高すぎると思われた集客目標500人も堂々クリア。多少の赤字は出たものの、小さな失敗は山ほどあつたものの、”第1回としては上出

活動を始めて丸十年。せつかくだから
河川筋目のイーブントをやろう。朋田ナミ

来”的イベントだったのです。ありました。

何が節目のハーモニーをやるか、機日十三
ツトには毎年たくさんの人人が集まるけれ

おいしいお茶が積れる棚田、壇でべにを防ぐ棚田、レッドデータブックに載つ

ど、開催地が遠かつたり、集まるのもやはり関係者が多かつたりして、一般的の都

てゐるような生き物が当たり前に棲息する棚田、美しい風景としての棚田……。

市住民が気軽に参加するにはまだ敷居が高い。それなら、ということになつたわ

一昔前に比べれば、「棚田」に対する社会の認知度はずいぶん上がりました。そ



山形県朝日町 棚田ママの会ブース



迫力の御陣乗太鼓

農地保全の助人～週末コメつくり隊～（新潟県柏崎市）

私は、(財)柏崎市農業振興公社に勤務していたとき、旧黒姫村鶴川地区上向集落で「週末コメつくり隊」を立ち上げた。「週末コメつくり隊」は、耕作放棄寸前の一団の山間田を稲作実習用として公社が農家から預かり、そこを1枚単位で分担して管理する(米をつくる)人達のことである。中には数枚、10数haを受け持つ隊員もいる。兼業農家が週末中心に米つくりを行っているのと同じように、自分の休日を使い米つくりするのである。隊員は市内の非農家をはじめ長岡、東京からの人もいる。稲作初体験の人達ばかりだが、2、3年もすると山間地の水田を保全する大事な人材に成長する。そやレンジ」。そして昨年春、隊員の中から36歳の兼業農業者が誕生した。

隊員には春から秋までの間に8～10回程度、その時々の天候や稲穂を前に水害で傷んだ上向の用水取り入れ口。土糞を積んで応急復旧作業中の隊員たち



の育ち具合に合わせた管理の要領、注意事項などを「便り」にして配布。

隊員はそれを基に作業を進める。

小川から用水を引き込むための、

春一番の水路の掃除や補修は隊員全員で行う。小型耕耘機と田植機は、中古機を公社で用意し無料で貸し出す。隊員はそれら機械を操り、肥料や除草剤を撒き、日常的な水管理も担う。畦畔や農道・

水路の雑草は、伸び具合を見て各隊員が自らの休日に合わせて刈る。

豪雨で水路が傷めばみんなで補修する。さすがにコンバイン作業は危険が多い。機械の維持も大変なので近所の農家に頼み、隊員は補助作業に従事する。機械が行けないような田んぼは手刈りし、脱穀だけコンバインで行う。乾燥調製作業もライスセンターに依頼する。必要な資材は、まとめて購入し受け持ち水田面積に応じて小分けする。

それがお米は公社に帰属。地代分を差し引き、残りは全て受け持ち面積に応じて隊員に管理のお礼と

だけではない別の価値観をもって、農地を、環境を維持していく方策

だけではない別の価値観をもつて、だけではない別の価値観をもつて、農地を、環境を維持していく方策

だけではない別の価値観をもつて、農地を、環境を維持していく方策

竹内 吉一

家に匹敵する出来栄えだ。稲は強い。基本さえしっかりと守り実践すれば、ある程度までの収量は上がる。

柏崎市旧黒姫村鶴川地区は、昭和43年に柏崎市に合併した山間地である。昭和40年の総人口は21

くり隊を立ち上げた平成12年には、252人、72ha、69戸に減り、70歳以上は46%にもなっていた。当

時上向集落で稲作を営む家は、集落に唯一住む80歳を超えた老夫婦だけであった。ほかの農家は市街地周辺に転出し、稲作はかなり前から止めていた。過疎と高齢化が進行したところでは、他所のオーナー制に見るよう、日常管理をオーナーに代わり地元の人達で行うこと自身が困難なのである。

第14回棚田サミットは

長崎県雲仙市・長崎市で

第15回棚田サミットは

新潟県十日町市に！

2月14日、東京都立産業貿易センターで第2回理事会を開催しました。第12回日南市サミット開催報告の後、次回8月24、25日に栃木県茂木町で開催される第13回サミットの開催概要の説明があり、

開催テーマに「美しい土の里～棚田から明日への提言～」が発表されま

りました。また、第15回サミット開催地として新潟県十日町市も承認され、開催希望が停滞気味であ

りました。また、第15回サミット開催地として新潟県十日町市も承認され、開催希望が停止気味であ

ります。

1年間事務局を担当させていた

峰広理事で農林水産省、衆議院議員会館(棚田議員連盟)等へ表敬訪問をいたしました。大変有意義な活動であつたと感じております。

翌15日には会長、副会長、中島

峰広理事で農林水産省、衆議院議員会館(棚田議員連盟)等へ表敬訪問をいたしました。大変有意義な活動であつたと感じております。

1年間事務局を担当させていた

峰広理事で農林水産省、衆議院議員会館(棚田議員連盟)等へ表敬訪問をいたしました。大変有意義な活動であつたと感じております。

1年間事務局を担当させていた

峰広理事で農林水産省、衆議院議員会館(棚田議員連盟)等へ表敬訪問をいたしました。大変有意義な活動であつたと感じております。

1年間事務局を担当させていた

峰広理事で農林水産省、衆議院議員会館(棚田議員連盟)等へ表敬訪問をいたしました。大変有意義な活動であつたと感じております。

1年間事務局を担当させていた

峰広理事で農林水産省、衆議院議員会館(棚田議員連盟)等へ表敬訪問をいたしました。大変有意義な活動であつたと感じております。

事務局ニュース

事務局、愛知県新城市からのお知らせコーナーです

力添えもあり、今年度は会員数が増えております。会員勧誘につきましては今後も会員の皆様のご協力をお願いいたします。

また、日南市サミットで使われた「棚田へ行こう！」の歌が棚田テーマソングとして承認され、第13回茂木町サミットでも使われるようになりました。

翌15日には会長、副会長、中島

峰広理事で農林水産省、衆議院議員会館(棚田議員連盟)等へ表敬訪問をいたしました。大変有意義な活動であつたと感じております。

1年間事務局を担当させていた

峰広理事で農林水産省、衆議院議員会館(棚田議員連盟)等へ表敬訪問をいた

棚田の楽校企画『棚田・のんびり・棚田』展開催(新潟県新潟市)

がつこう

棚田ネットワーク共催、05年度

新潟—棚田の楽校企画『棚田・のんびり・棚田』展は6月18日(土)~21日(火)に新潟市民芸術文化会館ギャラリーで開催され、300人以上の皆さんに見ていただき、好評のうちに終了いたしました。種々な御協力、御支援をいただいた皆様に感謝いたします。

(1)『棚田つて何?』
棚田についての基礎知識と、その環境をパネル等で紹介し、稻苗を棚田に見立てた飯台に植える『擬似田植え』も体験してもらつた。

(2)『04年度「棚田の楽校」活動報告』

棚田の楽校の04年のカリキュラムに沿った学習や体験を写真や絵で大図を作り紹介した。

(3)『キヨロロの紹介』 体験学習のフィールドの1つである松之山の里山科学館「森の学校」キヨロロをパネルや体験展示物等で紹介した。

(4)『棚田の絵画展』 酒井英次(楽校生)の棚田画のうち、新潟の棚田を中心に15点を展示。

(5)『棚田の写真展』 中條均紀さん(写真家)の山古志の棚田を約15点展示。

(6)『立体造形展』 青柳健二さん(写真家)の国内外の棚田を約30点展示。

(7)『ワークショット』 特別講師を招き、講演会を開催。

(8)『講座』 棚田が育む生物たち』 永野昌博さんのユーモアあふれる、棚田を中心とした豊かな生態系についてのお話。

(9)『販売品コーナーの設置』 入口に看板を掲示し、募金箱を置き、支援協力のお願いを行つた。

(10)『震災地域の棚田復興支援のお願い』 澤畠拓夫さん(キヨロロ研究員)のお話で棚田の生き物、お米についてのカルタを作つた。

(11)『本展をふりかえって』 (1)皆さんに棚田文化を、より知つてもらい、一緒にこれを守り、支援しましようという、メッセージが伝わつたと確信します。

(2)搬入出、飾付や講演会に多くの人が来てくれ、今後の棚田保全、支援の主力になる人達に、頼しさを感じた。

(3)棚田をある程度知つていている我々が、種々な手段で、他の人に紹介し、棚田文化を伝え、守り、支援する輪を広げてゆく時が来ているのではないでしょか?

(4)棚田が育む食材の数々——あなたも出来るゲテモノ料理——

(5)『恩田眞人さん(鴨川の陶芸家)の棚田の土を使った陶芸品の展示』

(ハ)酒井信次さん(彫刻家)の木を使つた造形作品の展示。

(ニ)古田木綿子さん(楽校生、作家)の大布を使った作品の展示。

(ホ)伊藤希代子さん(楽校生、造形作家)の流木を使った、インスタレーション作品の展示。

(イ)「ホンモノそつくりのバッタを作ろう」

岩野行孝さん(棚田ネット会員、棚田フットワーク代表)によりススキの葉を使ってのバッタ作り。

(ロ)「大ーきな棚田の絵を皆さんで描こう」

永野昌博さん(キヨロロ学芸員)を先生に、大画面に棚田や周辺の生き物を描いた。

(ハ)「棚田の土で粘土遊びをしよう」

伊東希代子さんのアドバイスを受けながら、棚田の土入り粘土で工作を行つた。

(ニ)「棚田カルタをつくろう」

澤畠拓夫さん(キヨロロ研究員)のお話で棚田の生き物、お米についてのカルタを作つた。

(3)棚田をある程度知つている我々が、種々な手段で、他の人に紹介し、棚田文化を伝え、守り、支援する輪を広げてゆく時が来ているのではないでしょか?

「棚田に新しい風を!」

(ハ)酒井信次さん(彫刻家)の木を使つた造形作品の展示。

(ニ)古田木綿子さん(楽校生、作家)の大布を使った作品の展示。

(ホ)伊藤希代子さん(楽校生、造形作家)の流木を使った、インスタレーション作品の展示。

(イ)「ホンモノそつくりのバッタを作ろう」

岩野行孝さん(棚田ネット会員、棚田フットワーク代表)によりススキの葉を使ってのバッタ作り。

(ロ)「大ーきな棚田の絵を皆さんで描こう」

永野昌博さん(キヨロロ学芸員)を先生に、大画面に棚田や周辺の生き物を描いた。

(ハ)「棚田の土で粘土遊びをしよう」

伊東希代子さんのアドバイスを受けながら、棚田の土入り粘土で工作を行つた。

(ニ)「棚田カルタをつくろう」

澤畠拓夫さん(キヨロロ研究員)のお話で棚田の生き物、お米についてのカルタを作つた。

(3)棚田をある程度知つている我々が、種々な手段で、他の人に紹介し、棚田文化を伝え、守り、支援する輪を広げてゆく時が来ているのではないでしょか?

「棚田に新しい風を!」

(1)『棚田つて何?』 棚田についての基礎知識と、その環境をパネル等で紹介し、稻苗を棚田に見立てた飯台に植える『擬似田植え』も体験してもらつた。

(2)『04年度「棚田の楽校」活動報告』

棚田の楽校の04年のカリキュラムに沿った学習や体験を写真や絵で大図を作り紹介した。

(3)『キヨロロの紹介』 体験学習のフィールドの1つである松之山の里山科学館「森の学校」キヨロロをパネルや体験展示物等で紹介した。

(4)『棚田の絵画展』 酒井英次(楽校生)の棚田画のうち、新潟の棚田を中心に15点を展示。

(5)『棚田の写真展』 中條均紀さん(写真家)の山古志の棚田を約15点展示。

(6)『立体造形展』 青柳健二さん(写真家)の国内外の棚田を約30点展示。

(7)『ワークショット』 特別講師を招き、講演会を開催。

(8)『講座』 棚田が育む生物たち』 永野昌博さんのユーモアあふれる、棚田を中心とした豊かな生態系についてのお話。

(9)『販売品コーナーの設置』 入口に看板を掲示し、募金箱を置き、支援協力のお願いを行つた。

(10)『震災地域の棚田復興支援のお願い』 澤畠拓夫さん(キヨロロ研究員)のお話で棚田の生き物、お米についてのカルタを作つた。

(11)『本展をふりかえって』 (1)皆さんに棚田文化を、より知つてもらい、一緒にこれを守り、支援しましようという、メッセージが伝わつたと確信します。

(2)搬入出、飾付や講演会に多くの人が来てくれ、今後の棚田保全、支援の主力になる人達に、頼しさを感じた。

(3)棚田をある程度知つている我々が、種々な手段で、他の人に紹介し、棚田文化を伝え、守り、支援する輪を広げてゆく時が来ているのではないでしょか?

「棚田に新しい風を!」

編集後記

次号、2007年度、46号からライステラスが変わります。年3回(初夏号、秋号、冬号)の発行とし、本協議会の事業内容にも入っている「調査」や「情報提供」、また「交流」も重視し、内容の充実を図っていくこととなりました。

棚田保全や地域活性化の気運を今後さらに盛り上げていくため、カラーページも設け、文字も大きく見やすく、ページ数も増やします。今後は写真情報も増やせそうです。「こんな棚田を見つけた!」とか、写真情報も含め、そんなみなさまからの情報をお待ちしています。

情報はライステラス編集部あてに、封書やFAX(宛先是表紙記載)、メール:fctanada@furucara.comへ。

石井里津子

(1)『棚田つて何?』 棚田についての基礎知識と、その環境をパネル等で紹介し、稻苗を棚田に見立てた飯台に植える『擬似田植え』も体験してもらつた。

(2)『04年度「棚田の楽校」活動報告』

棚田の楽校の04年のカリキュラムに沿った学習や体験を写真や絵で大図を作り紹介した。

(3)『キヨロロの紹介』 体験学習のフィールドの1つである松之山の里山科学館「森の学校」キヨロロをパネルや体験展示物等で紹介した。

(4)『棚田の絵画展』 酒井英次(楽校生)の棚田画のうち、新潟の棚田を中心に15点を展示。

(5)『棚田の写真展』 中條均紀さん(写真家)の山古志の棚田を約15点展示。

(6)『立体造形展』 青柳健二さん(写真家)の国内外の棚田を約30点展示。

(7)『ワークショット』 特別講師を招き、講演会を開催。

(8)『講座』 棚田が育む生物たち』 永野昌博さんのユーモアあふれる、棚田を中心とした豊かな生態系についてのお話。

(9)『販売品コーナーの設置』 入口に看板を掲示し、募金箱を置き、支援協力のお願いを行つた。

(10)『震災地域の棚田復興支援のお願い』 澤畠拓夫さん(キヨロロ研究員)のお話で棚田の生き物、お米についてのカルタを作つた。

(11)『本展をふりかえって』 (1)皆さんに棚田文化を、より知つてもらい、一緒にこれを守り、支援しましようという、メッセージが伝わつたと確信します。

(2)搬入出、飾付や講演会に多くの人が来てくれ、今後の棚田保全、支援の主力になる人達に、頼しさを感じた。

(3)棚田をある程度知つている我々が、種々な手段で、他の人に紹介し、棚田文化を伝え、守り、支援する輪を広げてゆく時が来ているのではないでしょか?

「棚田に新しい風を!」

会員募集中

新しく会員になったみなさま

<個人正会員> 沢畠 亨(熊本県水俣市)
林田弘治(熊本県南関町)
佐藤守利(福井県いわき市)

<個人賛助会員> 野澤俊晴(愛知県岡崎市)
上野裕治(新潟県長岡市)